

藤井 徹著

菓木栽培法

三

福岡第一師範學校
(學校圖書)

分類 番号	第	號
部	門	
著者氏名	目次	
全	1	冊ノ外 1
分番	第	號
	624	

福岡縣立師範學校

圖書部

植物部

番 33

號 3

8 冊ノ内

T1A1

61

F57

菓木栽培法卷之三

東京 藤井徹 著

田中芳男 閱

坂本徳之枝

か 藤竹齋 畫

第二編 接木法

第卅三章 接木の總論

凡そ接木ハ、樹の同種屬（同種屬）より、何れも花粉の感
受すべき者ハ、共ニ其皮を削りて、層接（層接）し、木を
共ニ合着して成長せしむ。然（然）ども砧木及び
接方より、成長の遲速、接着の善惡、香味の變

化結果の多少、年齢の長短等の得失、何れも之が
善く擇み用ゆる事肝要なり。故に其接方にも切
接、高接、壁接、搭接、腹接、挿接、割接、芽接、合接、根接等
の數法あり。各樹の性質は從ひ其相應する
者か認て、技を施すべし。さても果樹は大抵煩
勞なくして成長の宜き仕方を用ゐてよい。但し
其中は同法のみよてハ着き難き者あり申へよ。
何の果樹ハ何の砧木よて、何の接方よ、宜しく
ふ事、各其樹の条下よ説き示すべし。

第廿四章 接穂の擇み方

接穂ハ、去年生トたる小幹若くハ枝の其太さ箸
位よりて、生氣壯んは勢力よく延たる者か、擇み
用ゆべし。多しハ南よ向たる者よても、法の梢細
くして、勢力乏しき者ハ、接て後よよく手か盡す
とも、花か着るにあまり早過て、本幹の成長ハ却
て宜しからず。故に菓實か収て專業と爲る者ハ、
穂か取るの用として、別は善種の菓樹を栽へ、年
々唯大枝のみか存して、悉く他の小枝を切除き、
又花蕾も摘去りて、生氣壯盛の氣條を生ぜし
む。而して其氣條の根本ハ、芽小きと質剛く、其末

梢ハ心髓太くして質軟あれば、其は接木の用は
達し難く、ゆへは唯其中部のみを取りて、先後に
切捨べく、其他穂枝切取ふ時刻、及び之を貯へ且
遠方へ送る法ハ、既ニ挿木の条下第九章以下に
委しく記置たれば、よく其處に參考を盡し。

第廿五章 砧木の擇み方

砧木ハ實生の樹三年目の春、其廻り二寸位より
三寸位までの太さを極上と見、凡そ廻り一寸位
より七八寸の太さ迄ハ、頗る接木の用と爲すべ
きれども、小ふる者ハ樹の勢力弱くして成長悪

く、又大ふる者ハ樹の勢力壯まりて成長もよく
ハ、素より速おきども、接木のとれは太根枝断切
たるが故、其處より削入りて年齢久しうに
又接口枝欠き傷め、の患りり、尤も居附砧ハ年
齡の長短は係りなく、又挿木根吹株分等にて
作りたる苗木は用ゆるに限り、各々其条下を參
考すべく、又野立の樹ハ多年を経、成長したる
者あれば、外皮厚く木理輕鬆て、接口の工合大に
惡く、且多くハ木蟲を生ずるの患りり、
砧木は居附砧と掘揚砧との二様あり、居附砧ハ、

砧木の天然に生トたる處にて其儘鋸切り直し
接木する者云ひ、掘揚砧ハ接木する前年の十
月以後に適宜き樹を掘出し先づ便利宜しき場
所を假し栽置き來春接木の好き時節は再び掘
揚て之を接ぎ而して後望の園又ハ苗畑に栽
着。者ふり、扱其掘揚砧作る法ハ落葉樹ハ前
年の十一月より、今春の一月頃まで常緑樹ハ前
年の十月より若くハ今春の二月頃は之を掘出
し、幹は一尺二三寸の長さで切り根は五六寸四
分は短め第廿二圖繋ぎ細根を切去るべし是

砧木の切短様ハ其大小よりて不同り殊に
盆栽の樹ハ成丈小より成良と成又繋ぎ細根
を切去るものと根の中心より剪刀又ハ小刀を
入て切放てば切口は小線の裂目を受多し
よ之を假し便利宜しき土地に斜に一行は栽
着る根の廻りは偏く土の行届く様は善く覆置
る。箇様は爲たる者ハ接木の節は到りて切口
の廻りは膚内巻揚り其傍は白き小根が多し生
じて接着成長の状大より然まども一時は
数千本の樹を接ぐ時ハ多人數の手は觸て動

ま右の巻肉を損傷し傷むるを可れ、却て大に
成長の妨と成る故に、先づ其節を掘出したる
儘にて埋置き、後接木を行ふ時は、右の如く切
短くもよし、然まども成長の状は、兎角十分あり
ざれば、若く少々、の樹を接ぐより、成丈最初より
切短て、巻肉を損せざる様は、用心するは如くは
ふし、又前年より掘取りて、假栽するの用意整ひ
兼たる、或は俄に接木せんと欲して、野立の樹
を掘取り、直に接ぐは、妨ありと雖も、品は依り
て、砧木の生意いまだ根を行届くまで、中は最

早芽の萌え時、種々の癖も出来易き、落葉
樹常緑樹共に、其時節に應じて、掘取り置け、至極
宜し。

第廿六章 巻繩の事

接木の砧と穂とを合せ束ねて巻くは、砧木の小
なる者より、藁稗大なる者より、藁繩を用ゆべし、
共に引強き者を選び、適宜に擣て、前より少く
水に濕置て、而して此品は最も稱用する所
以、多く得易きのみより、雨露日光は暴を
て速に朽易き多れば、接穂の成長は随ひ、其力自然

と弛み緩みて固く絞縊るの患ありぎ色バあり、
其次は席草又ハ麻をも頗るも後一但一木皮毛
糸の類ハ容易く朽難まれバ一

第廿七章 接木の期節

接木相當の時節ハ南北の度數と地形の方向は
從て遲速ありハ勿論ふれど年々の氣候は因り
ても亦多少の違ひある者ありたとへバ二月頃
繁々雨降りて後又數日南風吹續くバ俗ハ馬鹿
風云草木俄に發動して出芽或催ちて例年よ
り早一又雨おく一て日々北風吹くとたへ芽出

稍遲一又春寒強く一て濕氣微き年ハ俗ハ空凍
と云草木萎へ病みて芽出最も遲一故に此期節
を同ト場所までも何の月日と確と定めがた一
只芽の漸く肥へ寛みて十分の生意成含み稍色
澤茂著たる時或真の接木相當の好期節と定め
おバ何處までも相違あるベ一但一此時の間
ハ至て短く纔ハ三四日は過ぎをハ接木師ハ此
間ハ數十萬本の樹を接ぐハ忙一亦まバ其五六
日以前より接初あるありち色先あるハ後より
又勝をバあり然るハ又寒接暑接新芽接等の方

りて老巧の者ハ全ク此時ハ拘るゝとハ
いへど此期節ハ造化の草木ハ化育も初
て春陽發達一新芽萌生も候ふまバ術の功拙
ハ拘りど能く接着して生活を得るあり是故
ハ接木爲る者此時ハ失もどんバ勞せざて
利多るべ一營業の者必振揚砧ヲ預備して
此真の好期節ヲ誤る勿き曾て東京ハ於て年々
此期節ヲ驗一試みたるハ先ハ栗、桃、櫻桃の類ハ
二月廿五日頃より三月十日頃まで梅杏、李の類
ハ三月上旬より十五日頃まで梨、榲桲、林檎の類

ハ三月五日頃より十日頃まで此類ハ皆早ハ善
とん芽綻て緑色ハ顯あたる時ハ惡ハ又柿、枇杷、
銀杏の類ハ三月十日頃より十五日頃まで柑、橘、
抽の類ハ四月中旬より四月下旬頃まで此類ハ
皆芽綻て稍緑色ハ顯あたる時ハ能く接着も
ものあり然も其期節の各處ハ於て不同ハ
一證ハ東京府下内藤新宿ハ高田、赤井邊ハ比
較も早キ三四日赤坂、麻布、青山邊ハ比
も遅キ四五日本所芝、築地邊ハ比も遅
遅キ大抵十日程の差ひ有り是ハ因て

之茂推さば、南北各處に於て幾分の不同ありと
は知るべし。

第卅八章 切接の事 附り看護の事

此法は用ゆる砧木ハ其廻り凡そ一寸位より以
上、一尺五六寸迄は用ゆれども最も恰好ありハ
廻り一寸二三分より三寸五六分位まであり箇
様ある者ハ甚だ接着し易く成長の状も大
よと速し加之一年乃至二年の間ハ穂と砧木
との間ハ層肉生じて全く接口は掩ひ塞ぐ故
に切口の枯き朽る杯の患あり扱朱は砧木の根

は切短め、細根は刈り假し便地は植置たる者ハ
掘揚て其幹は上際より五六分の處に鋸切るべ
し是き砧木と穂との兩刮口は合せし穂の下
の端ハ砧木の上中にある處とくけて其上ハ
皆土際より上に出る様は挿べきはあれハ根
柢の分る處より上凡そ二三寸の處は當るよ
り若し其間ハ尚繩を巻くべき餘地ありハ成長
短くして其切口ハ利き小刀にて平は滑くは削
り扱又前ハ説たる如く善き穂は擇し其本は左
の手は握り、總長さ凡四寸許の中間は三葉若し

芽と芽との間極短き者ハ、六七芽と存して、其梢
を斜に鋏切るべし之を切ると剪刃の先は傾きたる方
ハ、必ず拉け破る者おもふ、捨べき方先をも
握り而して再び其梢を握り、本を先よりて成丈
芽は左右に向き、外皮の日光よて黒くありたる
方は外と爲し、其方は本の端より長さ二三分厚
み三分の二を斜に削り、(第卅三圖)外又鏝して其
裏の方を長さ一寸厚み三分の一を尖に削り、内側
今又砧口に向ひて、其中心と皮との間の木理厚
きを方々擇み、凡そ南向の方より厚く、北向の方より薄

く皮の外面の滑よりて、切疵又ハ瘤節等あり、成
丈廣く平あり處の、外皮と白皮との間、大凡ハ
九分だけ、堅に削き、最後は又少し内は傾きて
白皮を切置き、(第卅四圖)再び白皮と木質との
間、紙の厚みだけ片を取り、三其時先は拵置た
る穂の裏の方を、砧の木質に當て挿込むべし、(第
卅五圖)若し砧の刮口廣くして、穂の刮口狭きと
なり、砧の白皮といたと附やうに、右左の一方
は倚せて挿しよく合をべし、若し少くても透間
ありて、平に合はぬとらへば、復た刮直してよく

合ハセ、搗藁^{うし}にて穂^ほの根元より堅く巻^ま揚げ、上の
方は漸々^{しだ}は緩く、最早^{いちばん}切口の際^{きわ}は到^{いた}りば、穂の
みは巻く、一回^{ひとへ}より再び砧^{いし}を巻き、藁^{わら}の両端^{りょうたん}
は併^{ひと}せて、固く拵^{ひね}り止^{とど}め置^おき、(第廿六圖)抑^{おさ}も此巻
方は、砧^{いし}木の大小と種類とは依りて、堅くも、
と緩くも、との差別^{さべつ}あり、若^もしあまり堅きまば、
養液^{ようえき}は根より枝葉^{えだ}まで昇^{のぼ}せ上^ある事の妨^{さまた}となり
、芽出ると遅く、或^{ある}は芽出^めざりて枯^かるゝあり、又
余^{あま}り緩きハ、養液^{ようえき}は昇^{のぼ}せ上^あるゝ多^{おほ}く、芽出^め
るとハ早^{はや}くれども、穂^ほの力は相應^{さうおう}せざりて、却^{かえ}り腐^{くさ}

出^いるものおれば、其工合^{こうごう}は篤^{あつ}く鍛煉^{たんれん}すべきを肝^{かん}
要^{よう}あり、尚^{なほ}各菓樹^{かくくわじゆ}の條下^{じょうげ}は、説示^{せつし}もべし、

今箇^{こんかん}様^{よう}は接^{せつ}たる木と、植場^{ちくばう}は持^も行^りき、砧^{いし}口^{くち}は水平^{すいへい}
は居^ゐ附^つけ、土^{つち}は掩^{おほ}ひ、根^ねの周圍^{まわり}は適^{てき}宜^いく壓^{おさ}着^つたき、
若^もし高^{たか}みよて、燥^{かわ}たる場所^{ばうしよ}ありば、細^こく碎^{くだ}たる土^{つち}
は、穂^ほの見えぬ様^{よう}は木^きをひ、卑^ひく濕^{しつ}りたる場所^{ばうしよ}
らば、穂^ほの上^{うへ}端^{たん}は、僅^{わずか}は顕^{あら}る位^{くらい}はふし、又品^{しん}は依^より
てハ、穂^ほの中^{なか}程^{ほど}迄^{まで}掩^{おほ}ひれしものり、是又各菓樹^{かくくわじゆ}の
條下^{じょうげ}は辨説^{べんせつ}もべし、都て以上の説ハ、掘揚^{くわうやう}砧^{いし}は接
ぐ仕方^{しかた}おきども、居^ゐ附^つ砧^{いし}は根^ねは刈^{かり}り假栽^{かりざい}も、等

の事ふく、只成丈土際より鋸切りて、節疵ふき處
を擇み接ぎ、前説の如く碎土を掩ふべし、如是は
成丈土際より鋸切り接ぐ事、稱用する所以なり、
爾後接木の成長は随ひ、穂より新根を生じ、向後
砧木の養分求めがたきと到り、自立して長く年
齡を保つべし、若し接口を高くせんと欲せば、高
接方の如く、三尺以上の高さありて、宜しう
に、さふくして、三尺より短く接ぐは、生力弱く
て、間もなく老衰へ、刺へ全木共に枯るものなり、
但し品類は依りて、此禍ふき者もあらず、多く

ハ長く繁榮し、希ふり、是故に方今ハ専ら掘揚
砧のみを用ゆるハ、畢竟あれが爲あり、又砧木の
大小は因りて、一箇の切口は、三四本の穂を接ぐ
ところ、是又前法は同ど、又砧口は藁にて覆置く
も、素より良法あれども、周りに一寸七八分は及ば
ざる者ハ、格別の効能あり、まうし之より大なる
者ハ、必ず此覆を爲し、其上は藁繩にて巻くべし
(第廿七圖)蓋し此砧口を覆ふ所以ハ、其切口は日
光は曝乾し、小破を發し、夫より漸々腐入りて、白
皮と木質との間は、永く層内を生ぜざりて、切口

灰塞ぐく選く其間ハ動されバ風災等の爲ハ接穂灰吹離されんくの恐きられバあり。

此接木したる者灰裁て後四五日灰經バ其地灰見廻り若し接穂雨の爲ハ洗出されおバ更ハ碎きたる土灰覆ひ若し其間ハ強雨降るくけりハ暗間灰見合せて直ハ其地ハ行き穂も砧木も共ハ踏出ざるヤ否灰吟味もべし芽出てへまぐ二三寸も延ざる中ハ至て柔弱ある者より暫時も日光ハ中らバ多くハ枯萎むべし又四五日灰過て再び其地灰見廻り覆たる土若し雨ハて固

くありし時ハ掘碎きて復た覆直し穂の上端のみ見ゆる様ハ爲置へし然りし固く成るくよくバ唯穂端のみ僅ハ踏る様ハ土灰去り又既ハ踏出たる時ハ其儘少し土灰和お置べし又より以後ハ尚又雨ハ漂たる土灰復し穂の芽出て十分ハ長むる迄ハ固りたる土灰碎き或ハ覆土灰開きて砧藥灰去る若し覆土固くありて上面灰閉塞ガバ新芽の土灰出る能くむて腐敗も又砧木の周りは藥灰生むる時ハ大ハ穂の成長ハ妨お甚しハ枯萎む者あり其外新芽の害

蟲防ぎ除く等の諸事は善く心を用ゐて手入
成爲さべし。總て接木の初ハ至て柔弱ある者ふ
きバ恰も赤子成取扱ふ如く心を用ゐざる時ハ
接着成長共ハ宜成得べう。又古き流儀にて
ハ青木、万年青等の緑葉、又ハ油紙の類にて、接
口を巻き其上ハ粘り土成堅く塗り而して莖又ハ
紙袋等にて日光成蔽へるゝあり。然れども箇
録の所作も、以手間入のゝりて格別の効能あり
とも見えぬ。又植樹家ハ假ハ一箇所の苗床成定
め、接たる木成先づ此所ハ並べ植へ、莖を以て日

蓋成爲し、新芽二三寸程延たると成ハ望の場所
ハ植替るを常例とせり。此仕方は若し接着ざ
る者りりバ其内より直ハ取除るゝ至極便利
な様成れとて、移栽の節或ハ新芽成損じ、或ハ植
附方りりき等にて病ハ損ふ事多し。其上成長の
状も前法の者ハ劣る様成る。方今ハ此法成用
ゆる者至て稀なり。

第廿九章 高接の事

是々切接の如く土際にて接々も地面より三尺
以上二三間も高き處にて接々仕方よりて接だ

了枝より、菓實は早く需め、又ハ大木の老衰へた
る者、枝接換より用ひ、抑く大木の砧は三尺以下
は短く切りて接ぐ、生気が耗失し、却て其壽命
は短ふ、故は成丈長はより、又接換は爲の
理と先は善種を以て、高接したる者、年々歴て大
は衰へ、菓は結ぶ事減き、時ハ、更は以前の處よ
り下枝切りて、是は接換へハ、枝葉再び榮へて、菓
實を得る多きよしあり。

新は高接は施す者ハ、砧木の幹若くハ枝の、其圍
み一寸五分位より、一尺五六寸の處、若し接換べ

き者ハ、以前の接口より下一尺許より、皮薄く
瘤節なき所を鋸切りて接ぐべし、餘ハ切接法は
異る、ふし、第廿八圖、但し接たる直下は、葉は延ば
て巻き、繩よて堅く縛り、其内は土を入、或ハ其
土の乾りぬ爲は、酢漿草の如き青草を植へ、鳥は
防く、預備は設き、第廿九圖、而して前法の如く、時
々見廻り、數日雨降りぬと、土へ少しの水は
流き、又新芽延びて五六分はあり、日光弱き方よ
り、次第は日蓋を除去すべし、又其芽一尺餘りよ
成たりと、暴風の用意は一兩年の間ハ、添木を立

て固く結附置へー(第四十圖)又掘揚砧まで接ぐ
とてハ、簡便の爲に接する木を横に卧せ、切接法
の如く碎たる土を覆ひ、新芽五六寸に成りて接
着したる證據を見定め、起し植へて粗日蓋を
爲し、日を経るに随ひ、次第に取除くべし、而して
此法の砧木ハ、從來長き木を砧木に頻に發生さ
べし、毎に心を用ゐて、取去るに怠るべき

第四十章 壓接の事

此法よてハ、砧木の最接着難き者や接ぎ、或ハ切
接を爲して、着兼たる者も、他の着たる新枝を壓

合せて、接ぐ方法あれば、別して簡易よして、素よ
り期節を抱くともふし、但し其内は芽出する時を
第一とし、唯芽の生ぜざる頃を宜きとす、其
接方ハ、接んと欲する新枝を壓して、枕に結し、
其向たる側へ掘揚砧を栽へて接ぎ、或ハ數本の
新枝ある樹の、其根の一方を断切り、是を横に伏
せ、其側は數本の砧木を並へ栽附て、一同に之を
接ぐ者あり、而して其栽附たる砧木を、切接法の
如く作りたる者よして、壓屈たる枝と觸合處の、
白皮と木質の間を、長さ一寸餘り根本より切口

の方へ刮上きりあげぶ第四十一圖壓おさたる枝即ち穂ほも亦
砧木てしきと觸合ふ方枝同ト長さおき三分の一枝本
より梢こぎの方かたは向むちて刮きぎ其止りとどり小刀枝横よこに
して少すこし前まへは傾かたむく外皮枝切去り第四十二圖兩
の刮口枝平へに合あせ（第四十三圖）若もし適宜ふさわく合あぎ
るとたハ更さらに幾回いくかいも改あらため刮きぎて合あふ（第四十四圖）砧木卑ひ々ひれバ切接
の如く上枝覆ふひ高たかきれバ油紙又莖この類るいにて接
口枝掩おほふべし又砧木を盆ひし栽くし或ハ藁わら苞ほうを植うて高
き臺たいに載のせ是枝新枝しんしは近きづく接くぎ或ハ砧木

枝接くべき處ところより鋸切のこぎりらぎて枝枝去り幹の中
腹枝刮きぎて接くぎ者ものあり（第四十五圖）是ハ壓屈おさくつた
る新枝枝以て腹接枝爲なす仕方しほうは其接口よ
り上の砧木枝残のこして長ながくもハ専せんら接着くわの勢
力枝助たすかんが爲なり是等これらも亦切接高接の如く
時々見廻りて手入ていれもべし殊ことは數本の砧木枝栽
列りねたる者ハ其間稠密しうみつあれば別べつして手入等宜
かりぎるときハ或ハ衰おとろへ或ハ枯かわき或ハ砧藥てしやく叢
り生うて接着くわせぬ者なり能く心枝用こえゆべし

第四十一章 搭接たぎの事

此法ハ、砧木小より切接法成用ゐ難き者、又ハ穂大より他の法もてハ、接ぎ難き者成接ぐ仕方よりて、掘揚砧までも居附砧までもとて、而して穂成擇み、砧木成作す等の事ハ、凡て切接法は異るゝなり、然り、砧木と穂との大きハ、必ず同等あり者成擇み、先づ砧木の根成握り、瘤節なくして圓き處成斜一寸許を刮離し、第四十六圖、次は穂の上端成握りて、其根本成砧口同等を刮ぎ、第四十七圖、此両刮口の際ハ、少くとも透間なき様はよく合せ、第四十八圖、若く透間ありハ再

い刮直し、又両口は稍大小よりて、合ハぬ時ハ左の右の一方は筒て好ち、最早善く合たると成ハ、葉はて下より固く巻上り、拵り止め、第四十九圖、之成切接の如く、裁附手入もべし、其所作ハ最も簡易より、殊は砧木ハ小なまども、穂の勢が壯ふれハ、成長の状も、大は宜し、但し穂と砧木の皮肉善く合ざると成ハ、生氣流通もどして着き難し、故に能く心成用ゐて、技成施さべし、

第四十二章 腹接の事

此法ハ樹の切口、枯易き者、或ハ切口より樹液津

ぐと流出て、是を爲す接穂は痛むる者、或ハ幾口
とも接て實は需め、又ハ枝少き者は、枝を添ふ等
は用ゆる者ありて、其穂及び砧木の造方、手入、植
附、見廻等、總て切接法と異るとあり、但し砧木は
鋸切るも、高き一尺二三寸ありて、其接ぐ處ハ上
際の中腹に削き、穂は稍斜まりて接ぐあり、(第五
十圖)甲、乙、丙、又枝ふき處は、枝を添加んと欲せば、
砧木の枝を全く切拂ひ望の場所は幾口も接ぐ
べし、(第五十一圖)而して之は害の内は、裁附の風
は中らぬ様は、圍置き、芽出て一二寸も延みらば

外へ移裁て密より日光を掩ひ、其後芽緑色は雖も
て頗る堅固は成たるは認む、次第は日蓋を去除
くべし、又高接法の如く、延みて巻き、土を入き、青
草を栽るも、都て以上の者ハ成長の状、大抵
切接の者は異るとあり、

第四十三章 挿接の事

此法は用ゆべき者ハ、穂の勢力至て柔弱まりて、
切接の用は立難き者、又ハ壓接とせんとあれど
も、種木ふき者は相應せ、而して砧木は切短め、幹
は鋸切り、其口は削り、及び日蓋手入、其外、總て切

接法は同一、但し種の長さは大抵一尺餘よりて、多くハ、昨年の占枝を連ね、且つ先は説たる如く、穂を擇み用ゆるハ、新枝を三つは切り梢と本を捨て、中間を取り、今此法は於ても亦是の如く、末梢を切捨て、中部を削りて、接口とも而して根本の端を斜に切り、且つ梢を切止たる端より、大凡二寸、三寸の間は、三芽若し芽と芽との間極短き者ハ、六七芽を存し、其下より接口より一寸餘を削り、并は砧木を削りて、合せ巻くも、總て壓接法は異るとハ、第五十二圖而して後

又、穂の根本を砧木の根と共に、土中へ埋込べし、あまハ穂の勢力弱まれば、取木を壓接したる如く、穂の本を土中へ挿し、十分は着生する間ハ、其生氣を助るんが爲あり、又水接と名くる一法あり、其仕方ハ、大概前法と同様あれども、唯穂の本の端を平に切り、炭火を焼きて、之を水に入れ置たり、竹筒、又ハ古徳利は挿し、砧木の根と共に埋めて、裁附るあり、第五十三圖、是ハ新芽出て、稍長なる迄ハ、時々水を加へ、或ハ換へて、其腐ち或ハ乾くハ、心を以て用ゆべし、又玉挿法の如く、穂の根本は

新土成鶏卵の太きは握附あて之成接ぎ前法の如く砧木と共に埋置くも同様なり之成玉接と名く

第四十四章 割接の事

此法も新枝の穂成、新枝の砧木は接ぐは非ざれは着生せざる者或ハ大木の皮厚くして切接成施し難き者或ハ苔成着たゞ長き枝成接て實成漏る者等を用ゆべし故は新枝の砧木は非ずば着生し難き松の類ハ先づ砧木として成丈勢力ありふ去年生の小幹若くハ心枝成擇み一本よて

も二本よても接んと思ふ丈の者の其中程の肥ふ處成鋏切り周囲の葉成其儘は附置きて總て他の小枝成剪除き叔穂も新枝の生氣壯ふよく延ある者成採り梢の芽成存し丈より下總長き二寸許は切りて其切口より上七八分の間は附たる葉成去り左右両側より六七分許は葉尖は刮下お第五十四圖是成以て砧口の真中長き六七分許り成二は割し其間ハ挿込み第五十五圖砧の周圍ハ附置たる葉成絞上ぎて其外より葉よて接口成固く巻もべし第五十六圖但し土

枝覆ひ目枝蔽ふれよと又大木の砧木は接
ぐよハ成丈皮の薄き場は擇み鋸切りて其口
枝丁寧は削り接べき隅は斧以い山刀にて穂枝
挿込だちの深きは豎は削り斧は其儘は込置き
て第五十七圖扱て穂の勢よく肥たる者ば擇
み下の端より長さ一寸許は外よりを稍厚く内
よりを稍薄く先を尖は削離し第五十八圖其穂
の大なるは随ひ益く薄く長くして割口はよく合
ふ様は削り而して又斧の柄の端は握りて少く
持舉る前は開たる割口は拾置たる穂の割口は

深く挿込め双方共は白皮と木質との間をひた
と合せ穂の刮口を砧口より一分許り高く出
て後より斧を抜去るべし若し適宜く穂枝挿込
み難き時ハ木楔は貫き斧を抜去りて後は挿
し筒様は三四口も接て穂悉く動かさば直
に葉巻附け土枝入を青草枝植へ鳥防は備へ或
ハ日蓋枝爲きて高接法は準ふべし但し穂の少
しよても動くも巧くハ是又高接法の如く蒙繩
よて固く巻くべし又苔枝着たる枝は接ぐよ
砧木と同一太さよして何本よても枝の附たる

穂の僅は一尺許を取り、其本の方より長さ一寸二
三分を、左右両側より尖は刮下し、切接法の如く
造りたる砧木の真中を、以上の長さは割りて其
間を右の穂を挿込、穂の刮口を砧口より一分
許り高く出して、第五十九圖(甲)(乙)壓接法の如く
巻き、切接法の如く植て、接口より一二寸高く碎
たる土を掩ひ、且日蓋を爲すべし、其花開き芽生
たらば、日蓋の方より次第に日蓋を取除きて
よし。

第四十五章 芽接の事

芽接ハ種穂寡き者多し接ぎ或ハ種穂を得難
あれば、纔に芽を刮取りて接ぐ一法あり、其用と
爲べき砧木ハ、大抵二年生三年生の者にして、其
接んど欲する處より上を高さ一尺許は切り、小
枝一本を残して、其餘の芽と枝とを去り、而して
種とせる芽ハ、種木の枝より芽を真中よりして、長
さ三四分を、下より上に向て刮上お、其上を横に
切込みて芽を取り、第六十圖(内)(外)是を以て復た
砧木の芽を、以上の如くは刮去りたる跡を埋め、
適宜く合せ、第六十一圖(イ)(ロ)麻糸又ハ木綿糸の

類もて、芽は障らぬ様も、下より巻上る第六十二圖、其上は芽の絶る顯る様も、軟膏又ハ粘土にて塗り、風を防ぎ、又其上は青葉又ハ紙袋にて、日光を蔽ひ置べし、或ハ碎たる土を以て覆ひ、又ハ植木鉢を以て、風の入らざる様を蔽ふも可なり、又一法は、穂も砧木も稍水氣を含て、皮の離れ易き時、砧木の芽の處は小刀を入きて、丁の字形に剖き、竹籠を以て、切口の隅を左右に開き、第六十三圖、上法の如く、刮取たる種芽を其間に挿込み、第六十四圖、并に巻きて、日蓋をふく等あり、

第四十六章 合接の事

此法ハ、切接と砧木細く、搭接と穂細くして、何まへも恰好せざる者、接ぐ仕方として、掘揚砧木と居附砧木とも用ゆべし、而して穂は擇み、砧木は折へ、及び裁断、手入等の所作ハ、都て切接法に異るゝのみ、然し其接口も大抵搭接の如く、一て穂の下に止り、皮嘴の形に刮ぎ、砧木も亦之に相應する様を切込みて、其内へ嵌込む者、亦是ハ容易に動り、ぞいて着生の状も大によろし、ゆへは未熟の人より最も便利の一法あり、其折

方々、穂の本の端より長さ一二分厚み五分の二
成、斜に刮ぎ、又其裏成長さ一寸餘、厚み五分の三
成、斜に尖く刮ぎ、(第六十五圖)内(外)而して其砧木
ハ、切口より下七八分の處成、横より穂の外端の
刮口ハ、相當より丈の深さは斜に切込、又切口
のしより、手前の木質成少く残し、以前の切込ハ
行違様ハ、堅に割りて穂成合せ、若し穂細くして
砧木大よりバ、其大より随ひ、殘さ處愈多く、
て、双方不同ふく透間ふき様ハ、度々合せ試みて
十分肌着より至るべし、(第六十六七圖)又一法

ハ、古昔より俗ハ木屑接と唱へ、砧木の拵方、削
方等全く前法同様おきども、素と細小の砧木お
きバ、穂ハ僅ハ二三分の長さハ切り、其内ハ一芽
を存し、之成二つハ割り、本の端ハ前法の如く外
より斜に刮ぎ、上の端ハ平に削り、(第六十八圖)甲
乙よく合せ、芽丈出る様ハ、下より卷上るより、此
法ハ百両金、蓄薇の類、一莖數金の價なる者成接
木よりハ、古來用來れども、菓樹成殖よりハ、間ハハ
用ゆるとあり。

第四十七章 根接の事

此法ハ砧木不足あるを株の代り根切採
りて接木も者あり其根ハ勢力壯よりて小根
多く外皮頗る薄き者を選び長さ六七寸は切り
周囲の繁き根は鋏切り後先の切口は平滑は削
り穂の肥て太き者を選び接ぐあり是れ切接法
より穂の刮口は砧口より高く出し又地は栽
時より穂より新根を生じ易くするが爲は切接
法より稍深く埋めるの他は更に同上の法は異
るゝなり(第六十九圖)又根の不足ある處へ根を
接ぐ法より(第七十圖)是も根の平均惡しき者

補給ひて樹の成長を善くする爲なり。

第四十八章

接木の餘論附リ皮接逆接、鏈接等の事

右接木法十種の外は皮接の法あり是も二本以
上三四本の樹を所は植附を互は觸合處の白
皮と木質との間を刮ぎ其は一束として麻又ハ
席草にて適宜く巻置き後ハ遂に合化して
一本と成り數本の勢力を合せて成長最速なる
者あり(第七十一圖)又逆接と云ハ穂を逆は接て
芽の下へ垂降りあむる者あり又鏈接或ハ猿接
と云ふハ素を壓接と同様あり接方より一本

の種木は以て、數本の砧木は接ぐ者あり、第七十
二圖其他如此き方法計多あれども、大概煩雜ふ
る而已として却て着生宜しうござれば、格別の
益用たりとも思ふれども、因て茲は之を省き、
以上の數章は於て、接木法の大畧を説示せしむ、雖
ども能く草木の性情を保全し、天然の機密を誤
らざりて、真に接着成長の道に盡せしむ、實は老
練の妙手よりござれば、確乎の徴證を辨識へ難
し、其理如何とあれば、同種の砧木より、一口接ふ
る者、一夫は雇使て、一日は三百五十本位はで接

ぐを通例とせん、其最巧者ある者ハ、千本以上は到
るも、けり、其數愈く多き者も、樹の本性を能く心
は會得して、自己の手は滞りなく應用し、接着成
長の工合を取失ふことあり、纔に二百本は足らざ
る程の者ハ、余程心力が盡せしむ、雖ども、却て以上
の者ハ及むが事遠し、是故は諸事老練の人ハ
擇み用ゆるよりござれば、結果の損益果して如
何哉考へ測るべし。

第三編 移裁法

第四十九章 移裁の總論

凡そ菓樹を栽するも、先づ土質と地形とを調査し、若し荒地ありば、成大早く開墾を始め、濕地ありば水抜の用意を設け、而して専ら菓實を収納する爲め、唯菓樹のみを栽する歟、或ハ各用樹、蔬菜又ハ庭樹を交へ栽する等の目的を立て、且地の形勢より、道路の方向と、溝渠の地位とを畫限し、樹の大小を計りて、布列の位置と、負數の多寡とを算定し、後來枝葉繁茂して鬱閉する小樹を、壯

觀を失はざりて、中間より自由な拔去るべき預備を施す等、一々精細な圖稿を製へ、而て後、植附の期節より五六箇月以前より、之を深く鋤返し、魁て石瓦の類を除き、全面を平均し、其土質は相應すべき者を選りて、順序に植附べし。

第五十章 植附の事

既に地の全面を鋤返し終りて、一樣に平均し、正しく植附の順序を定めて、各一は其地所を割分ける。植附は先づ大凡そ二三箇月以前より、植附穴を穿置べし、先づ栗、胡桃、樺の類は於てハ、其深

大抵四五尺幅も樹の大小は應じて切短たる根
先より二尺位廣く掘開き其掘揚たる新土を成
丈其周邊は薄く擴げ大氣日光は曝し其穴の底
はハ、葉、塵芥等々填るゝ一尺許りより其土
は熟上成五六寸覆ふべし但し梨、梅、葡萄の類ハ、
三尺位の深よりてよし然れども既に期節迫りて以
上の力作を施す餘暇ひくざるゝにハ、上法の如
く穴底は塵芥成入れ直は草木の腐土又ハ積
肥のよく腐爛たる物を三四寸の厚きは布き其
上は熟上成一尺許り入れて上下混合をべし又

積肥腐土は乏しければ先づ其底は熟土成填て
之は熟糞と厨下水と成等分は混合して一夜休
めたる者成一穴毎は二三升宛澆くべし尤も其
分量ハ、樹の大小と種類とは依て不同りるゝ勿
論あり且雨水の爲は糞汁等の流出ざる様周邊
は高く土成盛立て圍成爲置き其後十餘日より
て始て植附成ふべし

第五十一章 移栽の期節

移栽の期節ハ、樹の種類は依て定の難しと雖ど
も大略落葉樹ハ、八月下旬より五月上旬まで成

良とも、其中は最上の期節ハ、小樹ふれば葉落る
 時ハ移栽へバ、翌年の結菓ハ妨るゝふ、但し根
 悪く、或ハ枝幹大ハ切短なる物ハ、此限より
 ぞ、而して大樹ハ三月下旬より、常緑樹の春植ハ
 三月下旬より六月中旬まで、秋植ハ九月下旬よ
 り十月中旬までと定むれども、是亦種類ハ依て
 趣ハ異なる者多し、加之此常緑樹ハ、嚴寒中ハも
 葉落ざれハ、絶へど幾分の養液ハ吸収せざる
 ども、其間ハ寒氣の爲ハ養液半ハ氷凍りて、殆ん
 ど廻通する者の如し、故ハ全木稍傷みて、葉の色

は變ずる者あれハ、都て春植ハ勝れりともべし、
 其上最も寒氣ハ思ふ品類ハ、新芽既ハ一寸餘も
 長たるを移栽ハ好む物なれば、春寒とても
 亦忌惡むと思ふあり、尚菓樹の各種ハ就
 て、精く説示をべし、

第五十二章 掘取の事

既ハ移栽の期節ハ到りて、樹ハ過分の水氣ハ含
 まざる日ハ擇み、其在來の方向ハ印し、小樹又ハ
 根の形狀宜き者ハ、株より七八寸隔りたる處、又
 大ふる者ハ、夫ハ應ト二三尺の處ハ、環狀より

て株土を崩さざる様は掘廻し、其外は出たる太
根を小破の入りざる様は丁寧は鋸切り、周囲の
横根を盡く刈去り、土は次第は掘揚せて、太縄を
先づ株木は結附け、夫より株土の側面は掛て強
く引縛り、其上を軽く叩きて株土は喰込むやう
は漸々下へ巻下り、固く止る、若し非常は大あくば
尚其上は縄を斜に菱形は掛せて、弛み轉らざる様
は、まべし、第七十三圖、而して梯子、又ハ受木と名
くる長竿二本の上端を交互に縄よく固く結合
せ、其叔へ掘たる木を挟みて、倒れぬ様は受止る

具を以て之を丈夫は控へ置き、稍横は倒し、若し
命根りく掘開きて鋸切り、尚株土の崩れ、或ハ
根の乾かぬ爲は、延まで適く包むべし、但し極小
なる樹ハ、直は掘抜て物に立掛木きてよし、又葡
萄の如く、根を切詰る事は嫌ふ品ハ、探掘と稱し
て、一根毎は其両側を掘り、末梢まで傷め疵附け
ぬ様は、成丈長く取りて輪とふし、之を株土の傍
に結附きて、其上を延まで包むべし、是等の者ハ
小苗とて同様あり、而して落葉樹の苗ハ、株土
を附おいて、第五章床蒔の条は説たる如く、鋸を

以て側面より掘取り、或ハ畝の兩側は溝を穿ち、次第は引拔き可あり、然し常緑樹の苗ハ極小なる者も、必ず株土を附置べし、是多くハ泥工の鑿の如き具を用ゐて、其四方へ刺込み、最後は尚一方は強く斜に刺て拔取るなり、若し株土の崩れん事を恐るゝと、たゞ、搗藁を巻くべし、又數年を経たる大樹ハ、一時は掘取らざして、先づ最初は其期節を計り、前説の如く木の大小は應じて株土を附置、環状に掘廻し、尚大風は吹倒され、且ハ養液の通路は絶やさず爲よ、四方は五六本の太

根を残して其餘を切離し、其切口は丁寧は削り、周辺の溝へ腐熟したる肥土を埋め、尚幹枝として適宜く切をかりて、其秋又ハ翌春は到り再び残り置たる根を全く切拂ひ、繩を巻いて拔取り等、總て前説の如し。

第五十三章 植附の事

上章の如く掘取たる樹は、第四十九章の植附穴は運ぶよち、残したる枝は、他は障りぬ様は縛り、尚植附の場所まで、枝と根との釣合は點査して切短め、之は穴の真中は居へ、方向は正し、其周邊

は混和糞二三升と熟土とを等分は交たり者
以て其根を覆ひ、而して穴の内は土猶不足あり
ば、掘揚て曝置たり新土を熟土と交へる者、或
て地面より稍低く、株を少く左右に動かし、或
は拔擧おて隅々まで能く土を込め、其周囲は小
高く土を築立て、其内は水を十分は澆ぎ、其時ま
た株を少く動かし、小根の間まで不等ふく、能
く土の行届く様をせし、而して其後水全く乾
きたるば、更は又土を加へ、株際を小高くして、稍
踏附べし、又大木は、根の切口を丁寧は削り、幹枝

と根との釣合を見定め、穴底は細碎土を布き、且
つ上法の如く混和したる土を次第は覆ひて、小
根の間まで能く土の行届く様を、細き杖を縦横
は突込み、之を凡八合程充たるとき、水を澆ぎて
能く拌交へ、其稍乾くは及んで、再び土を十分は
入れ、固く踏附るあり、然るは最初は印し置たり
方向を誤らざるは最緊要なれども、根と枝との
形状は由りて、却て此は向きて枝少き方、或は南
は轉し、其方へ枝根を増さる事あり、又従前
土は覆はれたる所より、株を稍引上げて、浅く

植附る茂良とれ、若く深くして、土は多く掛る時
ハ、必しも病み衰る茂免れむ、能く心得べし、叔斯の
如く植附たる樹ハ風等は揺動れ、思爲は長き竿茂以
て、幹の中程より上よ、三方より控茂らる、其竿の
根本へ、杭茂おちて、固く結止置べし、尤も之は念
茂入れハ、竿を幹へ縛る處は、葉茂巻くもよし、蓋
し揺動れて、根の周りハ間隙茂生せば、是より日
光照射みて、樹茂枯らむとけり、又竿茂鳥居の如
く建て、其横木ハ樹幹と結止るもけり、或ハ一列
は並栽たる樹も、長竿茂横は當て其幹茂一々

結止め、其両側ハ斜に控杭茂施たるもあり、又小
樹ハ、唯添木茂建て結びねくもあり、何れも其處
の模様は由て、種々の仕方もあるべけれども、鬼
角成丈堅固ハ措置し肝要あり、又植附て後ハ、雨
降ると稀ふくバ、時々水茂流ぐべし、其十分着生
する迄ハ、恰も病者は等しあれば、若く其間ハ水
涸れ上乾きて、營養の源茂失り、忽ち萎へ衰へ
て、遂に枯るゝと外けく、又遠方より運入れ、多
くの回数茂経て乾涸たる者は、多分の水茂流ぎ
て植附るバ、之茂吸取ると能ハば、却て根茂

腐らゝし、生残害ある者多し、故は一時は多く澆が
むして、毎日少許宛與るに樹とん、又水氣乾きて、
白くふりたる者ハ、先づ假は濕地は植置くか、又
ハ暫時水は浸して引揚ぎ、之は稍滴て置いて後ハ
植附るべし、又柿の類の如く、あまり水は好まぬ
者ハ、植附て後ハ之は澆くハ甚だ惡し、但し過分
は乾たる者ハ上法の如く根は暫時水は浸せり、
又ハ植土は少く濕して植附るべし、又葡萄ハ古來
の相傳はて、根は切短め或ハ一尺も二尺も深く
植れども、此方ハ其幹より更ハ新根は生じ、而て

後ハ枝葉共ハ榮ふる者ふれば、成長大ハ後
あり、蓋し此種類ハ元と命根ふき者にて、他の樹
と同おろしど、故ハ之は淺く植へば、旱魃ハ傷み
て枯れ易し、是は以て斯く深く植るふらん、然
かゝ樹木の深植ハ、總て甚だ好まぬ事なり、葡萄
ハ挿木にて、至て根は生じ易き者ふれば、假令
深植せむとも、全く枯るゝに到らぬ、然れども三年
の後ハ掘出して、之は試バ、植附以前の古根ハ、盡
く朽敗して一も存りし者ふるべし、故ハ掘取
る時は疵附たる根ハ、更ハ丁寧ハ切直し、幹枝と

も成丈、小く切短め、其根は穴一面に擴ぶ、其根
先ハ深く埋めて、其上は肥土又ハ熟土を覆ひ、其
株ハ猶他の樹木の如く、淺くもべー都て根は傷
めろと嫌ふ種類ハ、其根は長く掘取りて、植穴
一面に擴ぶと肝要あり、但し接木の苗を穂より
直に根を生ぜぬんが爲に、元來の種穂の分ハ、
土中へ埋まらるやう小株は深く下げて、植附るこ
多し。

第五十四章 手入の事

手入ハ、樹は移栽て後ハ、雜草は去り、肥糞は灌ぎ

古枝、枯枝等ハ刈除き、害蟲は防ぐ等の力作より
て、先づ肥糞は灌用する法ハ、上章の如く苗木を
植附て後、春植を芽出て着生の状態に定め、秋植
ハ翌春の萌芽以前ハ、根先は當る處は小溝を掘
廻し、其樹の大小より由て淺深けれども、中等の
者ハ大抵三寸許りの深より、再び株際より其
小溝へ向きて斜に切下る、第七十四圖、其處は成
長糞は不同なく灌ぎ、土は軽く覆ひ、其後四五十
日経過して、復た同種の肥糞は用ゆべく、然るに
ホト翌年の結葉を認むる樹ハ、其冬の寒糞は用

ぬきて翌春三月下旬いまだ芽出ざる頃より、
大凡三十日毎に三四回の成長糞を灌ぐべし。然
れども既に苔を着て來春の結菓を催す者ハ多
年菓實を收納する者と同一く大寒中より大寒
後十日頃までの間は寒糞を潤澤に灌ぐべし。蓋
し樹の勢が強く木質が堅實くするを以て
當り此時の糞養は過る者未だのみあらず兼て
寒防の功用られハ成丈早く用ゐて決して
之を惜り或ハ其時は違ふべし。而して其後
花謝んとも頃更に結菓糞を與へて菓實の成

長を助る不熟の患を防ぎ又其全熟は先づ廿
四五日以前に菓實を十分肥豊し且つ佳好の
味を含ましむべき爲は復た美味糞を與ふべし。
是れ肥糞を用ゐるの大略なり。然れども樹の種
類は依て度数を増減し或ハ用法は異なると者
ハ。尚又各樹の除下は示さず。但し雜草布蔓ま
る時ハ其養を吸奪する故に時は拘らず勉て之
を除き直に樹邊に埋るゝ。又ハ焼て灰とふさば
肥養の一助とも成べし。又川枝ハ風雨の災は罹
りて挫き摧け或ハ折れ傷きたる幹枝又ハ害蟲

の爲は、半枯たる者或切斷し、或ハ枝葉のみ非常
に榮て、本幹ハ微弱く、又ハ枝の一方のみ茂りて、
全木の平均惡しむ者或切短め、或又枝葉繁くま
るは梢或茂り、結葉或留るは傍芽或摘取るの類
ありて、其枝葉のみ榮たる者或切小め、其
勢を自然と本幹に移りて之或強壯く之は因
て結葉の數或増え、又一方は偏たる枝葉或
刈たれば、四方一齊は暢茂して成長宜しく、又老
樹或伐き、其株より更は新葉或生し、再び繁
榮へ、又品は依り、幹と枝葉との成長甚盛ふれど

も、結葉十分ありざる者の根と枝と或適宜く切
小めて、其勢力或殺ぶ、葉或増へ、熟時或早めて、
永く枝上は保つべし、其他立木の恰好地所の模
様は依りて、他の障害とあり、或ハ大氣、日光の流
通或妨るが故も、多少の枝葉或刈る等の事、總て
此操作は非ざるべし、而して大枝ハ鋸よく截り、其
口或再び小刀或以て平滑は削り、粘土又ハ軟膏
或塗る、或ハ油紙或以て包むべし、小枝ハ鎌又ハ
剪刀よく、是亦成丈ハ土よく壅置べし、右何
れも、銳利の刃或擇て、破損あざる様は用心を盡

否れば其處より朽敗して後害を誘導する多し。此つ之を施すべき時侯を考へて、猥と行ふと、其ハ過分の養液を耗失して、大に全木を傷め、甚しむハ枯る者有れば、宜く左の法を守りて、慎んで犯さず勿れ。

落葉樹ハ、二月頃寒氣稍退りども、未だ芽の發動を認ざる時節、即ち幹枝へ水分を含まざる以前ハ、之を切るも格別の弊害あり。然れども既ハ水氣は多分を含みし時ハ、其切口より養液を洩して大に惡し、又大寒以前ありバ、必ず寒氣は傷み、

動れば其切口は枯るもの患ありて、是亦宜うたゞ、併し葡萄の如きは、遮寒の具を取り除べき時節ハ、既ハ芽は萌で故に、十月下旬より十一月までの間、其葉は落る時に行ふべし。又常緑樹ハ、三月四月の頃、寒氣は傷みたる黄葉の、漸く緑色は復らんとする時侯に、之を施すべし。此種類ハ落葉樹より別して、寒は傷み易きれば、秋刈枝を忌むべし。都て芽の生長する時節は刈枝するハ、兎角損傷の基よりて、養液を耗失するの大害なり。此を知るべし。今其一例を擧ぐば、古來草綿を作る

者、必^ず其枝梢^えを摘^と取^りる事^{こと}は常^{つね}習^ねとせり。然^{しか}るに
近^き來^きの工^く夫^ふは、人々習^し熟^じの肥^こ糞^ふを加^く減^{げん}し、枝梢^え
を一切^{いっけつ}摘^と取^りる者^{もの}は、綿^{わた}吹^ふよく、収^{しゆ}納^な多^{おほ}く
して屑^{くず}綿^{わた}を^も見^みず、然^{しか}るに之^{これ}を摘^とて肥^こ糞^ふ不^ふ足^{そく}あり
ば、大^{おほ}抵^{たい}屑^{くず}綿^{わた}のみよて、収^{しゆ}納^な大^{おほ}は劣^{せう}れり。之^{これ}よ由^{よし}て
考^{かん}れハ、葡^ぶ萄^{たう}蔓^{まん}等^らハ、他^た樹^{じゆ}より生^{せい}長^{ちやう}宜^いし者^{もの}は、
新^{しん}芽^がを摘^と取^りる事^{こと}格^{かく}別^{べつ}の支^しふき様^{よう}あれども、成^{せい}丈^{ぢやう}
芽^がの小^{せう}ある時^{とき}は摘^とて、養^{やう}液^{えき}を洩^しるに欲^{ほつ}する
あり、其^{その}他^た葡^ぶ萄^{たう}梨^りの類^{るい}ハ、棚^{たな}又^{また}ハ墻^{かべ}壁^へは附^つ托^{たく}して、
其^{その}枝^えを縛^{むす}り、或^{ある}ハ諸^{しよ}樹^{じゆ}の枝^えを偃^{えん}曲^{きよく}する等^ら、何^{なん}れも菓^{くわ}

實^{じつ}を肥^{はい}大^{だい}成^{せい}熟^{じやく}せしむるの良^{りやう}法^{ぽう}あれバ、其^{その}品^{ひん}は應^{たう}
じて施^しすべき方法^{ぽうはふ}は、各^{かく}樹^{じゆ}は就^{すなは}て示^しさるべし。若^し夫^そ
の害^{がい}蟲^{ちゆう}の如^{ごと}きハ、樹^{じゆ}は隨^{したが}て類^{るい}は異^いなるのみふ
るに、土^ち地^ち、氣^き候^{こう}は由^{よし}て互^{たひ}に變^{へん}化^{くわ}あり、其^{その}形^{けい}状^{じやう}は説^{せつ}
かバ、甲^{かう}蟲^{ちゆう}、匍^ぼ匐^ふ蟲^{ちゆう}、油^{あぶら}蟲^{ちゆう}、木^き蠹^こ、蝸^{かき}牛^{ぎう}、毛^け蟻^ぎ、胡^こ蝶^{てつ}類^{るい}、其^{その}數^{かず}
甚^{おほ}く多^{おほ}く、其^{その}異^い能^{のう}を論^{ろん}せば、芽^が葉^え枝^え、葉^えは啗^{くは}み、幹^{かん}莖^{けい}、
皮^{かわ}根^{こん}を蝕^くし、津^{しん}液^{えき}を吸^すひ、花^{はな}實^{じつ}を食^くふ等^ら、其^{その}害^{がい}一^{いつ}ふ
らぞ、其^{その}最^{さい}甚^{しん}は、一^{いつ}郡^{ぐん}一^{いつ}國^{こく}は布^ふ蔓^{まん}して、盡^{じん}く養^{やう}
樹^{じゆ}は枯^かむ者^{もの}ありと云^いふ、今^{いま}斯^{しか}の如^{ごと}き災^{さい}禍^かは目^め撃^{げき}せ
ざれば、未^{いま}だ驅^{かき}逐^{しやく}の策^{さく}を試^しみず、唯^{ただ}勉^{めん}て空^{くう}氣^きを閑^{かん}

通し生蟲の源を防ぎ、瓊々の昆虫ハ時ニ臨て之
を屠り、或ハ之を埋め、或ハ諸油石灰等で流ぎ、或
ハ鐵線に貫き、銃藥で點して之を攻む、其巢窩を
爲して小卵を遺すを恐る者ハ、枝を連ねて切取
り、遠地ニ運びて悉く焼捨べし、又寄生苔衣等の
如きも、大ニ樹ニ害する者あれば、是亦輕慢し
て棄置し勿れ、都て是等の手入を施す事殊ニ夏
秋の間ハ日々園中を見巡り、至細ニ心を用ゐて、
諸樹を點檢し、僅ニ其兆を見れば早く之を防ぐべし。
草木栽培法卷之三 終